

大学教育の潮流

歯学研究科の目指す大学院国際共同教育 —東アジアスタンダード歯学教育システムの模索—

高橋 信博◎文
text by Nobuhiko Takahashi

東アジアの 歯学大学院教育事情

日本、中国、韓国といった東アジアは、第二次世界大戦後、欧米型の教育研究体系に沿って大学院教育を進めてきました。しかし、歯学のように心身を対象とする学問は、そこに暮らす人々の民族的形態からだつぎと特徴や疾病構造(どのような病気が多いか)はもちろんのこと、文化的特色(健康や死生観に対する意識)を反映したものであることが大切です。そのような中、東アジアの連携のもと東アジアの特色を活かした教育研究体系「東アジアスタン

ダード」の確立が望まれつつあります。

大学院歯学共同教育に おける日本の役割

東アジアから日本への留学希望者は常に一定数おり、とくに東北大学は魯迅ゆかりの大学でもあることから中国からの留学生に人気が高くなっています。さらに、日本の歯学研究の水準は、質・量とも、世界では米国に次ぐ位置を維持しており、近年は中国・韓国の急追が見られるものの東アジアにおいてはまだ圧倒的に優位にあります。特に、東北大学大学院歯学研究科においては、二〇〇〇年以降、研究論文が世界的な評価を高め、歯学における国際的プレゼンス(存在感)は向上しています。さらに、二〇〇二年に本研究科が提唱した次世代の歯学「インターフェイス口腔健康科学」の考え方のもと、文部科学省特別経費「生体バイオマテリアル高機能インターフェイス科学推進事業(二〇〇七—二〇一〇)および「生物非生物物インタージェント・インターフェイスの創成事業(二〇一〇—二〇一〇)」を東北大学金属材料研究所や同工学研究科と連携しながら進めており、東北大学ならではの学際融合的な歯学研究を実践しています。

このような背景のもと、本研究科がま

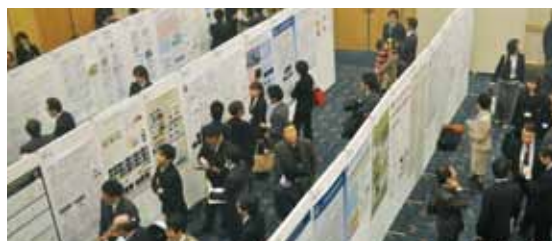
め役となって「東アジアの学際融合的歯学研究拠点」を構築し、東アジアの中心的大学との連携による「大学院共同教育」を核とした留学生受け入れ体制を整備すること、そして「国際知」「融合知」をキーワードとした歯学のイノベーションを通して「東アジアスタンダード」を構築し、日本を含む東アジアの歯学・歯科医療レベルの向上を図ることを開始したところです。二〇一一年に仙台で開催した国際学会でのシンポジウムでは、中国・韓国・モンゴルから大学教育関係者が集まり「Current Activity of Research and Education in Asian Graduate Schools」と題して意見交換を行いました。

二〇一二年からスタート

二〇一二年十二月に北京大学、四川大学(中国)、二〇一二年三月には天津医科大学(中国)と大学院共同教育に関する学術協定を結びました。さらに、現在、ソウル大学、全南大学(韓国)との学術協定を準備中です。この大学院教育プログラムは、双方の大学院生がそれぞれの大学院に籍を置いたまま、双方の大学院で一年〜一年半の留学経験をもちことができるというものです。さらに、提出された学位論文が学位審査を経て

認められれば、双方の学位を取得することもできます。就学期間を通して、大学院生は双方の大学の複数の教員による研究指導を受けながら東アジアという環境の中で学位取得を目指すことになります。

ここで育った学生が、将来、東アジアに軸足を置き、東アジアスタンダードを実践するリーダーとなれば、期待は膨らみます。



国際学会ポスター会場



2011年3月7～8日に仙台市内にて開催した国際学会シンポジウムでの記念写真
中国、韓国、モンゴル、日本の講演者が集合

右より、Wei Li先生(四川大学華西口腔医学院教授)、Guo Chuanbin先生(北京大学口腔医学院副学部長)、佐々木啓一東北大学歯学研究科長、Amarsaikhan Bazar先生(ウランバートル大学歯学部長)、Sun-Hun Kim先生(全南大学校歯科大学長)、Li Chang-Yi先生(天津医科大学副学部長)、筆者



高橋 信博(たかはし のぶひろ)
1959年生まれ
現職/東北大学大学院歯学研究科副研究科長
(教育研究担当)、教授
専門/口腔生化学
関連ホームページ/ <http://www.dent.tohoku.ac.jp/>